美濃部重克校注

閑居友

中世の文学
三弥井書店刊

閑居友
中世の文学 第一期・第五回配本
定価 二六〇〇円

昭和五十七年五月二十五日 第二刷発行

校注者 美濃部重克
発行者 吉田栄治
製版所 栄泰印刷

発行所 株式会社 三弥井書店
東京都港区三田三―二―六
電話東京(〇三)四五一―九五四〇
振替口座 東京九―一一一二五番

大文社印刷

目次

解説……一
凡例……九
巻上目次……六三
巻上本文……六五
巻下目次……一三三
巻下本文……一三四
訂正部分の原態一覧……一六四
補注……一六五

解説

はじめに

潺湲亭時代に谷崎潤一郎氏の書かれた作品に「少将滋幹の母」という中篇小説がある。昭和二四年一二月から翌年の三月にかけての「毎日新聞」の連載である。王朝時代に舞台を求めた物語風のものであるが、語り手の目が、物語の場面の叙述や描写となって物語の中に溶解していたかと思うと、不意に語り手が自身の書斎に立ち戻って批評家然とした解説を加えるといった谷崎氏得意の手法をもってなったストーリーである。

内容は「吉野葛」や「葦刈」などで繰り返し用いられた、母を恋慕する息子といったモチーフを左大臣時平のために母を奪われた少将滋幹を主人公として展開したものとなっている。尾籠めいていて、ちっとも憎むことのできない、あの色好みの平中が、狂言まわしの役を勤めさせられている。そして、女への恋情を絶とうとして、女の排泄物を見ようとしたという、平中説話の有名なくだりまでが、巧みに取りこまれていて、耽美的な色彩を添えるのに役立てられている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

その中に、奸計をもって甥の左大臣時平に若く美しい妻を奪われた老年の国経大納言が妻への恋情を絶つために不浄観を修する場面が描かれる。一つは、一間に閉じこもった国経大納言が普賢菩薩の絵像の前で観想を凝らすところ、また一つは、夜、蓮台野とおぼしき墓地に忍んでいった国経大納言が屍体の前で九想観を凝らすところである。このあとの場面は、作品にグロテスクな色彩を与えている。

その描写ののちに、語り手は書斎の机前に立ち戻って、不浄観なるものについて解説する。まず、不浄観のことが分りやすく仮名で書かれた書物として「閑居友」という本があると述べる。そして、その上巻の第一九話、第二〇話、第二一話、下巻の第九話などを見ると、不浄観というのがどういうものなのか、おおよそ見当はつく、として、上巻の第一九話の「あやしの僧の宮づかへのひまに不浄観をこらす事」の本文を現代語に改めて引いている。

「乳野物語」などを見ると、その知識を谷崎氏は曼殊院門跡の故山口光圓師より「摩訶止観」の講義を通じて得たものであると記されてある。

不浄観は、自身を誕生させたところの種や、いまの自分の肉体、あるいは土・石・草・木などの自然すべてを、汚穢に満ちたものであると観想する観法の一つである。それは主として天台の僧徒の間で婬欲を対治するための方便として修されたものであった。

なかでも、屍体が腐臭を放ち爛壊して無機に帰する過程を九つに分って観想する九想観は、愛欲の無常であることを生々しく悟らしめるところのものであった。それは詩の題材ともされ、「九想詩」として空海作と伝えるもの、宋の東坡作と伝えるものなどが古くから存している。しかしながら、その「九想詩」はきわめて宗教的なものとして、絵解きや説経あるいは諷誦などに利用されるものであった。

一方、谷崎氏の作品の中では、九想観の腐臭を放つその凄絶さは、人間の華麗さを純化し際だたせるところの死

の影を強く印象ずけるものとして、この上ない道具立てとなっている。

中世にあっては、人々は無常の中に美を見出し、それを詠嘆して見せることを得意としていたとはいえ、九想観は美に結びつくなにものにも転位されることはなかった。というのは、それがあまりに宗教的なものであり、したがって、宗教的な時代においてはそれはあまりに生活に近いものでありすぎたからである。それに、ただでさえ死の影を強く意識していた人々にとって、どのように紛飾をこらしてみても、それは観念の世界からはみ出てしまって、生々しい死そのものを思い出させた。

谷崎氏が不浄観を説明しようとして「閑居友」を引かれたということは、それを題材とする文学作品の稀少なことと、また「閑居友」において、この四話がいかに強い印象を与えるものであるかをいみじくも示しているのである。

「閑居友」が、さる高貴の女性からの懇望によって脱稿されたものであるという成立事情を考えあわせると、その類少なく、私たちにはグロテスクにさえ見える話を四話も記し入れているのは、なんとも奇妙なことである。高貴な女性には式乾門院利子と安嘉門院邦子とが比定されているが、当時、彼女たちは二六才と一四才とであったという。愛欲は迷妄であり、女性にとって第一に超克されねばならない業のようなものと考えられていたとはいえ、多くの場合、比丘の修するはずのこの観法を「閑居友」の中に繰り返し説きつけているのは、あるいは作者自身の中に、そうしなければならないなにものかがあったからなのかもしれない。

それは二〇歳という若さで隠遁生活に入ったという作者の鬱屈した生活を無意識ながらに反映したものではなかったか。

この短い説話集では、説話はストーリーとして自立し、それ〴〵に放散することを許されてはいないのである。

話柄の上でも、再話の際の発想の上でも、作者の主体性が前面に押し出されている。

話柄としては主に、発心譚・遁世譚が集められている。しかも、それらは、遁世者としての作者の信仰内容に関わるものであるか、または、その心の琴線に強くふれるもの、つまり作者の中に内在するものと対比しうる要素をもった説話でなければならなかった。

いきおい、「閑居友」には説話としての面白みをもつものは少なく、また説話として面白いはずの話が、この書物の中で再話されると生彩を欠いたものとなっている。それは、作者が自分の主体を強く投影しすぎて、説話の命である意外性をストーリーの上で追い求めることがなかったことに由来する。外在することを拒否されたところに意外性が生じるわけがない。

下巻の第三話の「うらみ深き女生きながら鬼になる事」は素材としては、実に説話的なものである。男に疎まれた女が、男を取り殺し、子供や馬牛をとって食う鬼となって、ついには棲家である廃寺の堂もろともに焼き殺されるという、すさまじい内容の話がそれである。ところが、作者は、この素材の中に執念の恐ろしさや女の業のもつ悲しさといったものを求め、それをふくらませることによって、説話というスタイルのもつダイナミズムの上に、それをのせようとはしなかった。女の愛憎の業深さをストーリーの上に印刻してゆくかわりに、その無慚な所行を堕獄の因であるとして、この話を弔らわれねばならない女の話という仏教者流の鋳型にはめて再話したのである。久保田淳氏が「説話者としてはきわめて不徹底であり、不適格ですらある」（「怨み深き女生きながら鬼になる事―『閑居友』試論」　文学　昭和四二年八月号）といわれるのも、そうした作者の態度をいわれているのだろう。

「閑居友」の下巻はそのほとんどすべてが女性を主人公としたり、女性をテーマにしたりする説話である。それらは、女性の愛憎の業の深さを説き、またそれを超克することを得た女性達について語る。平仮名のやわらかな文

体を用いたり、説話末にモラルを説くにあたって、和歌や物語を多数引用したりする作者の姿勢は、その内容面の特性とあいまって、作者の編述意図の一端を示すものとなっている。小林保治氏は、その文体にメスを入れ、「閑居友」は女性むけの文章でかかれた女性のための著述であると説かれる。（「閑居友序説㈣」早稲田大学教育学部学術研究　第二〇号）高貴の女性からの誂えによって脱稿を見たという成立事情との関わりをみるところである。

女性を対象とする場合、内容は、求心的で感傷的なものとなり、またしば〳〵悲哀的色調を帯びる。一方、説話は外在するものを追求し、それをリアルに叙述することによって面白さを発揮するという本性をもっている。「閑居友」はこの背反する二つのものを破綻なく結びつけることに成功しているように思われる。

実のところ、「閑居友」の作者は、幾分かの説話者の目と幾分かの随筆家の目をもちあわせていたと見るのが穏当なところのようである。

随筆家は自身の周辺からはじまって、感覚的にその延長上にあると思われる範囲内の事物や現象などを、自身の内にあるものによって濾過し、分析的に捉え直し、その上にわずかばかり、皮肉や諷刺をまじえて、それを再構成してみせる。

「閑居友」は、「方丈記」などに顕著な隠遁者風の自己観照が印象的であり、随筆性の濃い内容をもっている。ただ、「閑居友」の作者は、遁世という閉塞的な状況の中に埋没してしまって、対象から距離をおいてそれを捉えるということができないでいる。しかも、その対象は現実そのものではなく、説話という、観念化の営みを経て、ある程度、様式化されたものなのである。その上、話柄の選択においても偏向性が見られる。

こうした側面からすると、いかに主体性が強く出ているとはいえ、「枕草子」や「徒然草」を知る私たちには、これを随筆といいきることもできないだろう。

「閑居友」における、こうした中途半端な両義性は、この作品の限界をなすものであったが、それは、中世の思潮の底流をなす説話への好尚と自己観照的な発想との融合という点において、鎌倉初期を如実に反映するものであった。

素材の上では、六家一一巻と総称される往生伝風の説話の系譜の上に立ったものであり、発想の上では、西尾光一氏がいみじくも説かれたように「発心集」や「撰集抄」と同じく、草庵居住者に特有の自己観照性を色濃く出している随筆風の説話集、それが「閑居友」なのである。

作者

大正六年の橋本進吉氏の「慶政上人傳考」以来、證月坊慶政の伝記が明らかにされてくるにつれて、慶政著作説は確かさを増し、いまは慶政上人を作者と見ることに、ほぼ落ち着いてきている。

従来は、池田亀鑑氏の「前田本閑居友解説」に詳しいように、慈鎮著作説・無名氏著作説・慶政著作説などの三説が行われてきた。

そのうち慈鎮著作説は、「本朝書籍目録」の山鹿本や猪熊本などの記載、「閑居友」の寛文二年刊本や譚玄本奥書、諦忍律師の「大光普照集」などに記されている。また、無名氏著作説は、山岡浚明の「類聚名物考」巻五に見られ、時の隠者で、世を厭い仏道に入った人か、としてある。この説は慶政著作説が出てのちも、それと並行して取り上げられることの多いものであった。

慶政著作説は、元禄三年刊の安藤為章の「年山打聞」巻上にあげられる契沖の書簡に、

「閑居友と申す書も、慈鎮の作と申候。披き見申候。入宋の事御座候。松尾證月房政上人作と存じ候。」

と見えるのが始めであろう。ところで契沖のこの卓見にも具体的な考証の余地は残されており、疑問視するむきもないわけではなかった。野村八良氏は、山岡浚明の作者未詳説がもっとも無難であり、推測としては契沖の慶政著作説がもっともらしいとされた。(『近古時代説話文学論』など)一方、和田英松氏は、慈鎮の住居が東山の吉水にあり、「閑居友」に記される西山の峯の方丈にあわないことを上げて慈鎮著作説を否定し、慶政の入宋の事実、および彼が承久四年に書写した「本朝新修往生伝」に

「貞応元年六月四日於二西山峯方丈草庵一書二写之一畢」

とある奥書きが「閑居友」の跋文のさまに同じであることなどから、慶政著作説を支持された。(『本朝書籍目録考證』)

池田亀鑑氏は、入宋した隠者であって、しかも文筆をよくした人とする無名氏著作説にかたむかれ、慶政著作説には考慮の余地があるとして、次のような二つの疑問を提示された。

その一は、上巻第三話に、あやしの山の中に隠棲して八年になる、とある記事と、跋文に、西山の峯の方丈で承久四年(一二二二)に脱稿した、とする記事とにもとずいて、もしあやしの山を西山とするならば、作者は承久四年より八年前の建保二年(一二一四)以来、西山に隠棲していたことになる。とすると、その中間の年時である建保五年(一二一七)に一年近く入宋していたらしい慶政の伝記とはあわなくなるというものである。この疑問は、羽田亨氏も池田説とは別個に慶政が明恵に送った「波斯文書」についての研究の中で示しておられる。(「日本に傳はれる波斯文に就いて」『史學研究會講演集』第三冊)

その二は、上巻の同話では、八年の歳月を送ってきた、あやしの山の中の住居に満足してはいないかに記されて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

いる一方、跋文では現在の住居の西山の峯の方丈に満足しているかに記されている。このくい違いを重視すれば、あやしの山が西山ではなく、上巻の同話に「むげに近きところなれども、そのかみ真野の入江を見侍りしに」とある「むげに近き」を空間的な距離の意と解して、作者は真野に近い山にいたと考えられる。ということは、「閑居友」の作者は、はじめ真野に近い山中に八年間を過して本書の一部を執筆し、そののち西山の方丈に移り住んで本書を完成した、ということになる。これは、西山の松尾に遁世して、そこに年久しく住んだとされる慶政の伝記にあわないというものである。(『前田本閑居友解説』)

ここにはじめて、本文解釈をもとにする慶政著作説疑問が具体的に提示されたのである。これは、慶政著作説を本文とかかわらせながら検討する際の一つの目安として、大いに意義のある提言であったといえよう。

永井義憲氏は、一方で本文解釈の上で池田氏の疑問に応じながら、さらに「閑居友」の記述をもとにその作者像を作り上げ、それを慶政の伝記に重ねてみて、その重なりの大きいことを示すことによって、慶政著作説を積極的に展開された。(「閑居友の作者成立及び素材について」『日本仏教文学研究』第一集所収)

この秀れた論稿によって慶政著作説の蓋然性は著しく高められたが、池田亀鑑氏の提示された疑問には、必ずしも明析な解答は与えられなかった。

その後、慶政に関する伝記資料の発掘がなされ、平林盛得氏の手によって、「慶政上人伝考補遺」(『国語と国文学』昭和四五年六月号)がまとめられるに及んで、慶政著作説を更に確乎たるものとする新たな手がかりが与えられた。なかにつけても、嘉禄二年(一二二六)又は三年に慶政によって書かれた「法花山寺縁起」に

「静以、飲二此山水一、焼二此山柴一、既以十有余年、調二息於此峯一」(書陵部本)

「弟子生年廿、常住二観自在王如来三摩地一」(天理本)

とある記述、また、その記述にもとずいてなされた、慶政が西山峯の方丈に入った時期を承元二年（一二〇八）であるとした推測などは池田氏の疑問に答える有効な鍵を提供した。

慶政の西山隠遁についてのこの推測を慶政著作説にあてると、上巻第三話にいう、あやしの山中に年を送って八年とする記述は、承元二年から数えて八年ということになり、それは建保四年（一二一六）であって、建保二年（一二一四）から承久四年（一二二二）の八年間と解することによって生じた第一の疑問は解消されることになった（一七頁参照）。ただし、建保五年（一二一七）に慶政が在宋していたことは間違いないが、その渡海の時期を記す資料はないのだから、年時にだけ固執すると完全にそれが解決されたとは言えないかもしれない。また第二の疑問については、上巻第三話が建保四年に書かれたとするなら、それは跋文の書かれた承久四年よりも六年も以前であり、またその間に渡宋までも経験しているといった事情を思いあわせてみると、住居への感想の変化は奇とするに足りぬことのように思われる。また、青山克弥氏が指摘されるように（「『閑居友』の成立過程に関する一試論」『説話・物語論集』創刊号）、前掲の書陵部本「法花山寺縁起」の記述が、上巻同話の

「此山の水を飲み、この山の柴おりくぶべき縁にこそはあるらめ」

とあるのに類似していることも、あやしの山が真野近くの山ではなく、西山を指すものであることを傍証しているように思われる。

それでは、慶政とは、どのような人物であったのか。慶政著作説を念頭におきながら、おおむね永井氏の御論稿を柱にして、「慶政上人傳考」・「慶政上人伝考補遺」・「伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集」などを参照して、「閑居友」の作者像に慶政伝を重ねあわせながら記してみよう。

「天台教団には属しているが叡山の僧ではない。禅・念仏に理解はあっても旧仏教の側に立つ人で釈尊追慕の念

が深く、明恵・貞慶などに近い考えをもっている。」（作者像―古典文庫『閑居友解説』。　以下に括孤でくくった本文はこれに同じ）

慶政は文治五年（一一八九）に誕生し、文永五年（一二六八）一〇月六日に寂した。享年八〇歳。「三井続燈記」には能舜に師事したとあり、「古今一陽集」には延郎の弟子とする。また「園城寺伝法灌頂血脈」には慶範の弟子としてその名が挙げられる。つまり彼は天台宗寺門派の僧であった。「東寺真言血脈」には行慈の六人の弟子の一人として、明恵房高弁とともにその名を列ねている。明恵は釈迦信仰者としても有名であり、「四座講式」を作成して釈迦思慕の念を表白し、また釈迦の遺跡に擬して石水院や練若台などを建てたりもしている。その明恵との交流は、「新千載和歌集」八七四　八七五・「続古今和歌集」一四九〇・「明恵上人歌集」の所収歌などによって深いものがあったことが知られている。

「入宋はしたが天台山・五台山には赴かず短期間であった。仏蹟を慕う気持はあった。」（同上）

「波斯文書」と呼ばれる音信によって、慶政は建保五年（一二一七）に二九歳の折に在宋していたことが知られる。渡宋前、および在宋時代の詠歌が、「続古今和歌集」八五六や「萬代和歌集」や「末木和歌抄」などに見えている。渡宋にかかわる事蹟としては、泉州で南蛮人に会いペルシア文を書かせて、それを明恵に送っている。それは、渡宋、渡天の志を断念せねばならなかった明恵への思いやりから出たものかもしれない。また福州において一切経を開板した際、浄財を喜捨し、かつその経典をのちに我が国に将来したともいわれる。「法花山寺縁起」には、同寺安置の大日如来は、渡海の途中で嵐に遭遇した折りに発願し、帰朝後その乗船の舵を材にして造立したものであると記されている。また、宝形の経蔵一宇に経典二五〇余巻を添えて、将来したことも記されている。また現在、佚本であるが「證月上人渡唐日記」の名が知られている。帰朝は、建保七年（一二一九）正月に西山の峯の

草庵で「続本朝往生伝」「拾遺往生伝」を書写していることから、建保六年（一二一八）中のことと推測される。

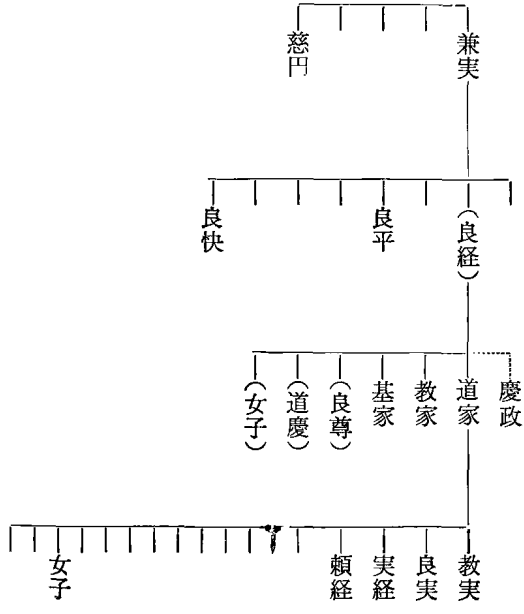
「真如親王について関心をもち特殊な知識があった。」（同上）

慶政の隠遁した西山の麓にある西芳寺は真如親王ゆかりの地であった。また、真如親王についての所伝は東密の中で、ことに、その渡天にかかわる所伝は、真如親王とともに渡唐した宗叡の所説を伝える広沢流の僧徒間に広く流布していたと思われる。慶政は、広沢流より出た保壽院流の行慈の弟子であり東密の真言の血脈をうけているから、親王の渡天にかかわる所伝も、その折に耳にしたのではなかったか。それに釈尊信仰者であり、天竺への憧れを強くもっていた明恵との親交の深さから考えても、慶政が日本人としては唯一の渡天決行者であった真如親王に強い関心を抱いていたと想像することができるのである。

「京の出身で九条、唐橋のあたりで幼年期を過ごしている。琵琶湖畔の真野のあたりを知っており、のち西山の草庵にこもり、八年を経て閑居友を執筆した。」（同上）

唐橋というのは、京都の東西の通りである九条坊門であり、上巻の第二一話に、鴨川の唐橋河原と記しているのは、九条坊門が南北に流れる鴨川と交錯するあたりをさすものと思われる。九条通りや九条坊門に面して立てられていた九条家一族の諸邸から唐橋河原までは、西の方へせいぜい千米余りの距離であったのだろう。慶政が九条家の出であるならば、第二一話に「ふるさとのちかく侍しかば」とある記述は現実味を帯びてこよう。

慶政が九条家の出自であったらしいことは、近年とみに明らかにされてきている。平林盛得氏は、「比良山古人霊託」の中で、慶政が行末を訊ねている人物や慶政と和歌の贈答を行っている人物の中から、九条家出自の人々をとりだし、それを九条家系譜にあててみると次のように整理できるといわれる。



（　）は交渉関係の知られないもの

□は適宜人名を省略したもの

（「慶政上人伝考補遺」―『国語と国文学』昭和四五年六月号　所載）

猪熊本「比良山古人霊託」の勘註には、慶政に関して、九条道家の兄であり、出家した理由は乳幼児の時に誤って取り落されて、背骨が出るといった不具の体になったことによる、といった注が加えられている。

慶政が著した「法花山寺縁起」によると、彼は、承元二年（一二〇八）に二〇歳の折に西山の峯に庵を結び、嘉禄二年（一二二六）または三年に伝教大師の遺構にならって、その地に法花山寺を創建している。そして、建保七年（一二一九）から貞応元年（一二二二）にかけて、「閑居友」の作者がしばしば言及し、引用もしている往生伝

類をその地で書写しているのである。

「高貴の女性から、この書の執筆を依頼され、承久四年（一二二二）三月には脱稿した。」（同上）

慶政は、九条良経の子であり、道家の兄であるという高い出自をもった人物であるらしいから、身分の高い人々と師檀の関係をもっていたことは容易に想像されるのである。ことに、後高倉院の皇女である式乾門院利子、その妹君の安嘉門院邦子との交渉は、「仏竜寺記文」の奥書や「風雅和歌集」巻一八に載せる慶政の歌の詞書などを通して窺い知ることができる。

「隠者の生活を願ってはいたが、院の女房などとの交際もあり、仏典はもとより、説話集、往生伝に通暁して、それらの欠を補うほどの識見あり、また和歌に深く達していた。」（同上）

「法花山寺縁起」の奥に記されている「奇事条々」には法花山寺の創建に関係して現われた奇瑞を記しているが、その中に、某院の女房が瑞夢を見たことを告げたことが記されている。

慶政が渡宋していたのは、中国では禅とともに律が大いに興っていた時代の名残りをとどめていた時代であった。日本でも、鎌倉初期には律が盛んになるが、慶政も、南山大師の「四分律行事抄」の刊行への喜捨を行っており、彼もまた律には関心が深かったもののようである。「閑居友」の巻上の第一三話などに律的な物言いが見えていることとも、それはよく対応する事実である。また、慶政が釈尊の信仰者であり、明恵の著書の書写を行っていることなども知られているし、天台宗の僧として、法花三大部や「智度論」に通じていただろうことは当然予想されよう。

彼は、そうした経典やその注疏についての知識とともに、諸寺の縁起の類や高僧や往生人の伝に対しても強い関心をもっていたことは注目にあたいする事がらである。往生伝類や「伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集」におさめられているよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com